

DOGNIN



ルネサンス・コンタンポレーヌ - 現代のルネサンス

21世紀の新しいバッグ創作のために



私たちは現在、価値観の大きな転換期にさしかかっています。個人主義、合理主義、進歩といった、近代社会の基盤をなしてきた理想に疑義が突きつけられているのです。歴史を振り返ってみると、ほぼ四百年毎にこうした価値の大転換が生じています。前回のそれは16世紀の「ルネサンス」でした。

「ルネサンス」とは、過去に再び目を開き、そこから学び得たことを足がかりとして新たな未来を切り開いていこうという、過去と未来への二つの方向性を持った運動です。16世紀、人々は、中世を通じて忘れ去られていた古典古代のギリシア・ローマ文化の魅力に再び目覚め、これを再生、復興させようとなりました。この「ルネサンス(再生)」こそが近代への扉を開いたのです。



「薬師寺吉祥天像」

宝珠を携えた吉祥天。どんな願いもかなえるこの宝珠は、サラマンダーにも似て、悪を除きこの世を浄めるとも。

21世紀に足を踏み入れた現在、バッグ「ドニャン」のクリエイターである私たちもまた新しい未来を探求しています。この探究の意欲こそが、私たちを絶えずイノベーション(革新)に駆り立て、同時にまた、近代社会の以前にまで遡る古くからの価値観を再発見するよう促すのです。

日本にも、同じような知恵の力学を表す「温故知新」という言葉があると聞きました。

物質主義の時代である現代において、人々は精神性を希求しています。現代人は個人主義であると同時に、協働性を回復させようと試みています。理性を社会の基盤に据えながらも、私たちの内で感動を求める気持ちは止みません。近代は、自然と対立し、自然を搾取することで築かれてきました。しかし、私たちは今、自然と共に創ること、自然との共生を求めています。



こうした新しい時代へ向けたチャレンジを前にしたとき、私たちは、いったん視線を翻し、近代の黎明期である「ルネサンス」へ、さらにまた、「ルネサンス」より前に横たわる「中世」と呼ばれた時代を見つめたい誘惑に駆られました。しかしながら、私たちは同時に、イノベーションへの懸命な努力の手を休めません。そして、私たちのイノベーションとは、近代のそれとは一線を画し、来るべき時代の新しい価値観と調和するようなものでなければならないのです。

フランスにおいて「ルネサンス」を最も端的に体現する場所があるとすれば、それは国王フランソワ一世の命により建設されたシャンボール城です。

「ルネサンス」に目を向けた私たちはまず、シャンボール城にまつわるシンボルを私たちのバッグを通じて甦らせるような創作にとりかかりました。

シャンボール城の代表的なシンボルがサラマンダー(火蜥蜴)です。フランソワ一世は、「我は善なる火で身を養い、悪の火を消す」という銘と共にサラマンダーを自らの紋章とし、その姿を居城の各所に彫り込ませました。

私たちもまた、21世紀の「善なる火」を探し求めているのです。



シャンボール城のサラマンダーを端緒とする「SOLOGNE(ソローニュ)」、「GOUM(グム)」、「CLOUET(クルエ)」、「LEONARD(レオナール)」など一連のバッグの創作は、ボリュームと装飾の両面における「感動の探求」です。

「SOLOGNE(ソローニュ)」は、ルネサンスのさらに向こうの、中世の大聖堂にも想を得たバッグです。中世の大聖堂においては、アーチ型の天井の重みを支えるために「オジーブ」と呼ばれる迫持が組みられ、これが天井の骨組みといった様相を呈するのですが、天井の重みを支えるオジーブを上下逆さにし、バッグを持つ人の身の回りの品を下方から含み、支える構造へと甦らせたのがこのバッグです。こうして出現したボリュームとサラマンダー模様の装飾は、はるか昔に存在した価値の体系への目配りであり、これを現代のバッグに再現することで、忘れられた時代の感動を掘り起こし、新たに分かち合おうとしているのです。



そして実は、「ドニャン」のバッグはすべてが、そのような目的性をもって創作されています。現代生活に適した実用的なボリュームをバッグに与えたいので、美しさがそこに備わるよう工夫を加えます。美しさが「感動」を生み出し、それを「愛着」に変えていくからです。

こうした考え方は、バッグの製作と自然の間に折り合いをつけていくためにも非常に重要です。使う人に、数ではなく質を求める消費を促していくこと。一つの意味を持った上質な製品を提供してこそ、長く使い続けたいという「愛着」を触発することができるのです。

イノベーションもまた、こうしたバッグ製作のあり方に貢献します。私たちの「ソフト・ストラクチャー」という特許技術は、新しいボリュームを生み出す一方で、使用する素材の量を減らすことができます。つまり、素材である革と裏地を特殊な方法で接着することにより、補強材を使わず、つまり素材の消費を減らしつつ、これまでになかったボリュームや堅さを構築します。



私たち「ドニャン」の以前にも、伝統と新しさを融合させながら新時代のクリエイションを実現していったもう一つの「ドニャン」がありました。

「ドニャン」は19世紀始めにフランスのリヨンで創業したレースメーカーです。1850年頃、地織り用のチュール織機に紋様を織り込むジャカード織機の技術を加えることに成功し、この技術革新を通じて、その後一世紀半にわたってフランスのエレガンスの代名詞ともなった「リヨンのシルクレース」を編み出しました。しかし、このシルクレースの仕上げは手縫いの刺繍です。革新的な機械生産と、リヨンの絹業者の間でフランス革命前から続いてきた伝統工芸である手縫い刺繍を組み合わせることで、ひとときわ華やかなリヨンのレースが誕生したのです。

伝統とイノベーションを両輪とするクリエイションのDNAを受け継いでいることが、私たち21世紀の「ドニャン」の誇りと自負でもあります。

2019年5月
リュック・ドニャン ラフィク・マイウ